

七月も終わりに近づき梅雨も明けると、気温三十度を下る日は無くなって、家の窓や戸を開け放しても茹だつてしまうような日々が続いた。居間の入口の戸と店の玄関口は真っ直ぐ繋がっている。私はカウンター越しにボンヤリと人気がない道を眺めながら、「強」にした扇風機の風にあたっていた。海風は林に遮られて生温い、湿気を多分に含んだ微風になる。軒に吊るされた風鈴も、時折かすかに鈍い音を立てるが、それ以外はほんの少し揺り動くだけで本来の役目を果たせずにいる。

この村の海は観光名所になっている。高い岬から見下ろす海原は雄大で、岩間で砕ける波は白い飛沫を咲かせる。遠い沖に見える漁船はまるで点のように小さく見え、ゆらゆら波立つ水面は光を散らせて輝く。しかし、ここに辿り着くための手段は三時間に一本ずつ通るバスだけで、一日に訪れる人は三、四人、多い時でも十人行くか行かないか程度だ。閑散として、大音量の蝉の聲ばかりが聞こえてくる寂しい場所だ。

一年中開けているうちの店も大して儲かることは無く、母は隣の町に働きに出ているし祖母が居ないときは私一人で店番をすることも少なくない。観光客が飲み物や軽食を買っていくくらいで、人がいるとき以外は居間で学校の宿題をしたり、本を読んだりして過ごしている。店の前にあるバス停を眺めて時間をつぶしたりするときもある。

今日も祖母は多分畑に出かけていて、母は仕事でいない。店番しながらさつきまでやってきた英語のテキストも飽きてしまい、別の教科でもやろうかと思っただけど暑さのせいかわる気が出ない。一人でいるのは好きだけれど、ずっと続くと退屈だった。汗で張り付くワンピースの襟を扇いで、おもむろに掛け時計を見上げた。

時計は十一時五十分を指している。あと十分で唯一の公共交通機関であるバスが到着する時間になる。私は少し退屈をしのげる可能性がある。健ちゃんが寄ってくればと仄かに期待した。健ちゃんは私の四つ年上の二十二歳で名前は東健太郎という。町と、この間を通るバスの運転手で、店から十五分くらい歩いたところにある家に住んでいる。小さいときからよく店に来ていて、子供のいない場所だからいつも一緒に遊んでいたけれど、今は昼のバスの待ち時間に寄るだけで、それ以外は会わなくなった。それでも夏の間、ここから動けない私の話し相手になってくれる健ちゃんを、未だ最も仲のいい友人だと思っている。でも、健ちゃんは一応大人だから、私のことを子ども扱いしてくるときがある。大して年も変わらぬのに。「健ちゃんの癖に！」と反抗的な気分になるが、本人には言わない。多分無意識にやっていることなので、指摘されても困ってしまうだろう。

しばらく経ってまた時計を見ると十二時、バスが来る時間になった。居間を降りてサンダルを履き、店のカウンターに立つ。お客さんが来るかはわからないけどバスの時間には店に立って降りる人の数を数えるようにしていた。民家以外に駐車場がないからそれがここを訪れた人数とイコールになるのだ。

エンジンの音がして、バスはするりとバス停にとまった。扉が開くとカメラを首にかけた

若い女の人と、男の人が降りてきた。二人は知り合いではないようだった。女の人は手で持っていた橙色のリュックサックを背負うと店に入ってきた。慌てて、いらっしやいませ、と言うと笑って挨拶を返してくれた。男の人はしばらくバスを見上げて立ち止まっていた。私は少しいやな感じがして男の人を見ていたが、女の人が品物を持って来たので、また慌てて会計をした。ありがとうございますと言った、と言って、店の外を見ると男の人の姿はもう見えなかった。

バスは時間合わせのためか、数分バス停に止まって、そのまま帰って行った。健ちゃんも寄って来なかった。私はカウンターに置いている卓上メモに「正の字」を二画分だけ書いた。バスも帰ってしまった、女の人もしばらくは戻って来ないだろうから、私はまた居間に戻る。そういえばまだお昼ご飯を食べていなかった。でも、暑さのせいで食欲もないからお昼は抜きでいいと思う。

十八時に最終のバスが町に帰って行った。祖母はもう家に帰って来て夜ご飯を作ってくれている。私は声をかけてから散歩に行くことにした。道は案外きれいに舗装されていて明るいもあるし、犯罪なんて起きようがない過疎の村で、子供が一人で歩いても問題ない。夏至は過ぎたがまだ日が出ているので危険はない。

私は岬に向かう道を歩いた。脇の林で蝉がなくて賑やかだった。朝から鳴き通して疲れのないのだろうか。もしかしたら交代制なのかもしれない。丸い腹を伸び縮みさせて鳴く蝉を前に見たことがある。電柱に止まっていたせいしばらく鳴き続けて、その後、ポロリと柱から落ちて動かなくなった。

どんどん歩みを進めていくとすぐ岬に着いた。海にせり出したような形で、周りは岩と少しの草木に囲われている。左端には電話ボックスとベンチが置かれている。岬には誰もいない。夕風のせい空気は淀んで海辺でも蒸し暑く感じた。岬の端の、海の縁に立つと緩やかに岩間を行ったり来たりする波の形がぼんやりと見えた。着くまでにどんどん日が陰って来たので、ちらちらと反射する光のほか、海の景色は黒っぽく陰ってはつきりとは見えなかった。

帰り道を歩き出して、夜までもう少し待ってから、警察の人に電話しなくてはと思った。ご飯食べてからにしようと思って、ゆっくりと帰路を歩く。海に向かって生暖かい夏の風が吹いていく。

最後のバスで、女の人は帰って行った。バスが付くまでにはずいぶん時間があって、彼女は私と話をしてくれながらカメラに収めた写真を沢山見せてくれた。光に満ちた海や、打ち付ける波の荘厳さがよくわかるいい写真。岬だけじゃなくて緑に囲まれた道やこの店を書いたものもあった。女の人はカメラマンだそう。専門学校を出てようやく働きたらしい。今日は休みだったけれど写真を撮りたくてここまで足を延ばしたのだと言った。私がいから頑張ってくださいという嬉しそうに笑ってくれた。

玄関を開けると風鈴がチリンと揺れた。家に入る前、確認にカウンターの卓上メモを見る。

「行き」と書いた横にある正の字は二画分だった。そして「帰り」と書いた横にある正の字はやっぱり一画分だけだった。

岬の海は観光名所である。でも、同時に岬の海は自殺の名所でもあった。男の人はとうとう帰ってこないで、次の日、岬の下の岩の隙間に打ち上げられたのが見つかった。

夏休みも中盤に差し掛かる頃になってやっと健ちゃんが店にやってきた。最近来なくて違和感があったからほっとした。健ちゃんは謎の多いというか少し不思議な行動理念があるので、これもその延長だろう。

「最近来なかったから売り上げが少し減っちゃった。」と言ってみると、「悪かったよ。」と苦笑いした。毎日遮るものがない海っぺりの道に沿って運転してくるからか、ほんの半月も経たないうちにこんがりと日焼けをして、逞しくなったように見えた。

店先で氷を入れた麦茶を飲みながら話をする。健ちゃんはお仕事の話や最近の町の話をして、私はいつも家族の話や学校の話をする。でも今は学校が夏休みで、話すことが少なくなってしまう。何か面白い話がないかと考えていると、不意に健ちゃんが岬の方を見つめて言った。

「そういえばすぐお盆になるな。」

しみじみという声に、もうそんな時期なのだと思った。

お盆にはご先祖様が帰ってくる。だからきつと父も帰ってくる、ということになっている。父は一昨年の丁度今頃、うっかり死んでしまった。うっかりというかあっさりというか。記憶の中の父はひどく優しい人で、きつとこんな場所で暮らすのはダメな人だった。岬で死んだ人たちに引つ張られていつてしまったのだろうか。確かめようのないことだった。

私がバスに乗る人の人数を数え出したのは父がやっていたのを見たからで、父が数え出したのは祖母がやっていたかららしい。父はバスの運転手だった。健ちゃんと同じように休憩時間にやってきて、店先で煙草を吸っていて、でも、子供が来るとすぐに火を揉み消すような人だった。いつも煙たい匂いをさせていたが、私はそれが好きだった。

「なあ、都。」

名前を呼ばれて振りむいたが、呼んだ方は顔を岬の方に向けたまま、目だけをよこして言った。

「夜は出歩くなよ。あと、夕方になったら店の玄関はちゃんと閉めろよ。」

私は首を傾げた。毎日夕方にふらふらで歩いているのがわかって注意されたのかと一瞬思ったけれど、そんな訳はない。私の行動なんて知っているはずがない。じゃあ、何故だろうか。訊いてみると健ちゃんは少し困った顔をして後頭部を触った。困ったり、言いづらいことがあったりする時の癖だ。

「いくら田舎でも女子の一人歩きは危ないだろう。」

「絶対うそでしょ。」

間髪入れずに言ってやると、ますます困った顔をして言う。

「だって、お前絶対信じないだろうし。」

「そんなことないかもよ。」

「いや、信じない。前もそうだっただろ。」

健ちゃんは頑なに理由を言わず、そっぽを向いてしまった。とにかく、戸締りはちゃんとしろよ、と言ってさっさとバスの方へ歩き出す。店先の扉から出ると、周りの光が強いせいで、健ちゃんの影が真っ黒に伸びた。

「あつ、じゃあさ、最近来なかったのと関係ある？」

バスのステップに足を乗せかけた健ちゃんは振り返り、少し顔を顰めたままで答えた。

「ある。」

「じゃあ、こないだ飛び降りた人と関係ある？」

「……無くはない。」

また来るから、と車内に去って行った。

今日のバス利用者はゼロ。店に来たのは健ちゃんだけだった。

夕食の時間、何となくテレビを流しながら箸を動かす。祖母も母もそういう所には寛容で、バラエティー番組の内容に時々文句をつけながらのんびりと食事をしていた。心霊特集をやっていたが、こんなところに住んでいるとなかなか笑って見ていることもできない。幽霊なんて想像の産物とも思うが、あながち現れないこともないと、そう思っている自分もいる。こうやって取り扱われていると不憫でならない。消費されるイメージとして一緒にたにされてしまうわけだ。私は何となく不愉快になったが、しかし、母と祖母は楽し気で、本当に神経が太いものだと思われつつ、尊敬する。

「こら、ナスもちゃんと食べなさい。」

野菜炒めの中から茄子をはじいて食べていたのがばれてしまった。ただ、キャベツや人参、玉ネギ等、ほかの野菜でも十分栄養をとれていると思うので、注意されるとつい言い返したくなってしまう。ぐにやりとした感触がどうしても、と苦手な人にはきつと伝わるのだろうが、二人とも何でも食べられる人なので、主張すると説教されてしまう。

「味付けは好きなんだけどね。」

口答えするのは、せめてもの抵抗である。実際、塩胡椒のシンプルな味付けはさっぱりしていて好きだった。逆に焼き肉のタレやカレー粉の味付けはあんまり好きじゃない、というより濃い味は気分を選ぶと思う。そして、父が作る野菜炒めの味付けはいつも後者だった。

「そういえば健ちゃん来たよ。」

「あら、よかったじゃん。」

「なんか、戸締りちゃんとやれてって言われた。」

聞いて、母は頷く。

「健ちゃんが言うなら。おばあちゃんも裏口見といってね。」

祖母もわかったわ、とすぐに頷いた。

「理由とか、訊かないのね。」

二人ともがあまり自然に受け入れる。母と祖母は顔を見合わせて、クスリと笑った。

「だって、ねえ、あの子がそういうってことはなんかあるのよ。」

「小さい時から勘のいい子だったからねえ。」

「そうそう、都が川で溺れかけた時も健ちゃんが教えてくれたんだから。」

「え、そんなことあったっけ？」

「四歳くらいだったから、覚えてないかもしれないかもね。怖かったんだから。」

どうやら、私が四つの時、健ちゃんが「都が川に溺れかける」というのを、彼の家にお邪魔していた父に訴え、父が母に気を付けるよう電話で知らせ、用水路に突っ込んでいこうとしていた私を間一髪で助けた、ということらしい。「教えてもらってなかったら今頃いなかっただかもよ。」と笑いながら母が言った。その他にも土砂崩れが起こることを予見し、岬で自殺しようとしていた人を見つけ出して止めたこともある、と母は自分のことのように誇らしげに語る。確かにそれはすごい。

「そんな特技あったんだ。知らなかった。」

「特技ねえ。都は夢がないこと言う。」

母は何が面白いのか、笑って言った。祖母はその様子をずっと眺めていた。そうこう話しているうちに、結局母に取り分けられてしまったおかずの、野菜炒めのナス以外を、口直し用に残していたキュウリの塩漬を残して食べ切ってしまった。冷ややっこも残しておけばよかったと悔いながら、いよいよナスを食べなくてはいけなくなって渋々箸を伸ばす。これだったら父の味付けの方が食べやすいかもな、と恋しく感じる。素材の味をかき消す焼き肉のタレ味はある意味優しさかも。

苦戦していると、祖母が「あ。」とつぶやいた。なんだ、と目を向けると、視線が合った。

「そういえば、駐屯所の高橋さんにお礼言われたわ。」

「えー、なんの？」

「都ちゃん、こないだの通報したんでしょ。いつもありがとうございますって。」

「ああ、偶々だよ。」

祖母はいつも坂を下った畑に行くから、よく巡査の高橋さんに会う。店番をしているときは誰かしらが乗車数を数えているから、家族みんな、そういう役に立つことが多い。そして夏の間の一度目は私が通報したから、そのお礼だ。この間の男の人のことだ。

「あんまり入れ込んだめよお。」

笑いながら言って、祖母は食べ終えた皿を台所へ運んで行った。何となくその背中を目で追った。私よりも一回り小さい背中は、真っ直ぐで頼もしくて、背負わなくていいものまで強く支える背中だ。

売り上げのほとんどないこの店を畳まないのは何故か。祖母が、岬に行こうとして決心がつかずに店の前で立ち止まっている人を連れてきて話を聞いているのを何回も見ただことあ

る。母もそう。そうやって話をしてくれる人たちは、引き返すのを躊躇いながら、それでも最終バスで帰っていった。乗車数を数えて警察に連絡するのも、全部、この店の義務だと、私はそう思っている。それで、入れ込めないから困っている。食べなくてもいいはずで、でも食べないと怒られる。ナスを食べると大差ない。それよりもっと、嫌いなこと。自分を支えるので手一杯な私にはあまりに荷が重い。

明日あたり、ナスとキュウリで牛と馬を作ろう。その程度で父が戻ってくるのなら、いくらでも作ってやろうと思った。取り敢えずは食器を片付けよう。残っている大皿と自分の食器を重ねて台所へ向かった。すでに洗い始めていたので「お願いしまーす。」と言って食器を置く。ちらりとこつちを見た母が「何しかめ面してんの。」とわき腹を小突いてくる。うっかり舌打ちをして怒られたから、そのまま自分の部屋に引っ込んだ。

暑くて、いつも閉めっぱなしにしている窓とカーテンを開くと、ほんの少しだけ欠けた月の鈍い光が道をほんのり照らしているのが見える。蝉の声はまだうるさく鳴り響いている。夜になると風は強く吹く。海風は林に防がれるが、陸風は遮られず吹き抜けていく。

窓から少し身を乗り出すと玄関が見えた。布の廂の陰になっていて扉そのものは見えなけれど、風に大きく揺られている風鈴の短冊の端が、よく目を凝らすと見える気がする。十メートルくらい距離があつて、蝉の声に風鈴の音はかき消されてしまう。しばらく、ぼんやりと通りを眺めていた。

どれくらい、そうしていたかわからない。いつの間にか、蝉の声がやんでいった。それで、幽かな風鈴の音が、やけに明瞭に響き、風が強く吹いて、髪をなぶる。必要以上に開けた視界。通り沿いの木の葉の緑も店の前の石畳の色も黒く塗りつぶされているはずなのに、鮮やかな色彩がはつきり見える。玄関前のバス停看板の脇に誰かいるような感覚がする。感覚というには現実味があり、しかし本当に誰かいるのかと目を瞬いても誰もいない。ただ、誰かがこちらを見ている、そう錯覚するほどに私は暗闇を見つめ、暗闇に見つめ返されている。玄関の前に、二つの瞳が現れ、私を見た。

慌てて目を逸らし、窓を閉める。建付けが悪くて、キイキイ引っ掛けながら無理矢理閉じたら、今度は開かなくなった。しまったと思っただけれど、安心した。これなら誰も開けられないだろうから。もう一度窓の外を見ても、部屋の照明が反射して自分の姿が映るだけだった。ついでに本やら服やらが床に積まれている散らかった部屋が見えてしまった。これは片付けをしないと怒られてしまう。誰に見られてもいいようにしておかないと。

カーテンをサツと閉め、何処から手を付けようかと考える。ついでに父さんの書斎も片付けようか。そんで何冊か本を借りよう。何故だか今日は父のことばかり考えている気がする。いや、何故ってこともない。明日は迎え盆である。

「ここもさあ、遊覧船とかカフェとか、もっと人が来るようにしちやえばいいと思うの。そうしたら死角がなくなるでしょ。」

そうならきたらきつと私も退屈しなくなるだろうし、東尋坊とかも観光開発がある程度成果を上げていると調べたことがある。健ちゃんは麦茶を飲みながら、肯定の意味なのか、んー、と唸った。

今日は店先じゃなくて居間に入ってもらった。店の軒にあるベンチで話すには、ここ最近の猛暑は厳しすぎる。直に降り注ぐ日光と通りの石畳に反射した熱で挟み焼かれそうだし、どっちかと言えば焼かれるより蒸される方がマシだと思った。私は黒くなるより赤くなるタイプなので、日焼けするとほんとに真っ赤なユデダコになってしまう。

エアコンがないから家の中も暑い。向かい合った健ちゃんの首元にも、汗の雫が伝っているのが見える。結露したグラスを置き、手に着いた水滴を制服のシャツで拭いながら足を組みなおしている。客用の青いグラスは、水の波紋の様な揺らめく影を落としている。蟬の音がうるさくて、二人とも自然と声が大きくなっていった。

「観光地とは名ばかりだしなあ。せめてバス以外の駐車スペースがあれば、ああ、そうすると俺の仕事無くなる。」

苦笑を浮かべ、また麦茶に口をつけた。すぐに飲み干してしまう勢いなので、私はポットごと持ってきてしまおうと冷蔵庫に向かった。台所のタイルは少し冷たく感じるから、スリッパを履かず、足をピタピタつけながら歩くのが好きだ。

ポットの中身はほとんど一杯分しか入っていなかった。仕方ないので空になっている青いグラスに深い茶色の液体を注いだ。

「そういえばなんで運転手になったの？私、ちょっとびっくりした。」

「なんで？」

「なんか健ちゃんは事務とか、そういう、部屋の中でするような仕事の方が好きそうだと思うから。バスの運転手なんてほとんど肉体労働じゃない。」

「ああ、確かに。この路線は、っていうかこの地方のローカル線はそこまで大変じゃないとは思うけど。どっちかって言うと運営する方が大変そうだよ。あと、俺も事務仕事するときあるぞ。」

「そうなの。ブラック？」

「全然。」

健ちゃんはクツクツと笑って言った。

「それで、運転手になった理由は。」

「小学生の時の夢なんだよ。」

意外な答えが返ってきた。小さい時に見ていた健ちゃんの影響では、彼がそんな夢を抱きやうがないからだ。町に下っていく方面のバスはそうでもなかったけれど、帰りのバスが岬に向かうにつれ、機嫌が悪くなったり、ひどいときは泣いたりしていたのを憶えている。岬が嫌なだけでバスは嫌いじゃなかったのかもしれない。でも結局岬と町の線を行き来しているんだから、それはどうなんだろうか。

「こっちに來るバス乗るの嫌がってたけどね。」

思ったまま感想を言うと、バツが悪そうに後頭部を触った。

「……それとこれとは別だろ。」

と適当な返事をして、麦茶に口をつけた。

「あつ、そうだ、都、昨日の夜外いったか？」

「行ってないよ。」

「そうか？」

「うん。なんでそんなこと……。」

言いかけて、口を噤んだ。健ちゃんに訊きたいことがあったのを思い出した。でも、どう聞けばいいのかわからない。彼は昨日言っていた。夜、戸締り、出歩くな、と。それは昨日の視線に関係があるのか。そして、おそらく健ちゃんはその正体をわかっている。私は彼の不思議さを信じなくてはいけないと思い始めている。私は見たものは信じる。実感してしまつたものは否定できない。例えそれが信じたくないことであっても。昨日のあの視線の正体がわかる人は彼だと、だから、一時期来なくなつたし、また来るようにもなつたんだと思つた。小さい頃から、それこそ出会つた時から健ちゃんは不思議な人だった。空を見つめて話すような変な人だった。だからこそ、健ちゃんは信じられる。

「何？」

私があまりに見つめるので、健ちゃんは居心地悪そうに言った。辺りの蝉の声は一層大きくなつていて、聞いかけの声が少し遠く聞こえる。私は一気に自分のコップに入っている麦茶を飲み干した。

「ねえ、健ちゃんさ、幽霊信じる？」

視界の端の風鈴の短冊がパタパタとひらめいた。健ちゃんは一瞬、不思議そうに眼を見開き、瞬きをした。随分と不思議なものを見るような顔で私を見つめる。

「幽霊……、都是信じているのか？」

健ちゃんの顔を見返すと、視線を逸らされる。健ちゃんは目を伏せ、机に映るグラスの影を指でなぞつた。真っ直ぐ伸びる藍の影は、彼の手の平が作り出す影に見え隠れしている。

「信じてるかも。信じたくないけど。」

「信じたくない。」

健ちゃんは私の答えをかみしめるように反復した。少し黙ってから、「なんだ。」と言つた。私は自分の頭の中を確認していくように、慎重に言葉にしていく。

「死んで幽霊になるのって、かわいそうだなって思う。せつかく悩み切つて、望みを託して海に飛び込んだのにまだここから離れられない。ここにはいられないと思つたからそうしたんでしょ。なのに、死んだのにここにいたら生きているよりも救いがありませんよ。」

言っていて自分の中にも疑問符が浮かぶ。でも、これなんだと思う。私は、生きてる人以外を本物だと思えない。一度死んだら、思い出という強固なフィルターがその間を隔てる。それは脚色で、「本物」じゃない。要するにイメージである。思い出という主観の中でしか、現実に故人は生きない。それどころか、思い出の中で変質する。そうならもう、生きて

いる人の世界に彼らは存在しない。この世界にはもう彼らの居場所は無くなるのではないだろうか。

ここにいると信じられることは枷であると、思ってしまうのだ。

風鈴がチリンとなった。健ちゃんは静かに私の言い分を聞いていた。私は話し終わって、どうしたらいいかわからなくなった。私が何を思ったって、結局のところ健ちゃんは答えを知っているのだ。健ちゃんはわかっている。私はそれがわかる。百聞は一見に如かずというのはこういう時に使う言葉だろう。

「フダラクトカイって知ってるか？」

聞きなれない言葉である。訊くとそれは「補陀落渡海」という漢字だといった。

「死後魂は海上の彼方にある先祖の住む理想郷に帰るっていう日本の自然信仰と浄土信仰がくっついたやつらしい。外に出られないようにした船を南向きの海から流す、捨身行の一つ。それで補陀落浄土に行くっていう。」

「信仰ゆえの身投げみたいなの？」

「俺も高校の時に本に出てきたのを読んだだけだ。」

と自信なさげに言う。

補陀落渡海と、南向きの海に身を投げるこの岬は似ていると思った。不謹慎な発想かもしれない。

「似てるだろう、ここと。もしかしたら本当にあるのかもしれないと思ったんだ。浄土とは言わなくても、人を惹きつける何か。浄土を願っているわけではないとしても、わざわざここを選ぶ人もいるわけだしな。」

「案外救われているのかもしれない。最後にはみんな海に帰って行く。」

健ちゃんは目を伏せて言う。切実な、願望のようだった。そして、彼にとってはそれが一つの事実でもあるように、はっきりと言い切った。「帰って行く」と言った。

母なる海、みたいなことなのだろうか。

玄関の方、海のある方向を眺めた。一瞬、海の方から爽やか風が吹いて、風鈴が涼しい音を立てた。その音色は温い空気に溶けて広がっていった。

「健ちゃん、いつから見えるの？」

「ずっとだよ。だから、信じるも何もなかったな。見えるんだから。……都に変わって言われるまでは普通だと思ってた。」

「私そんなこと言ったっけ？」

「言ったよ。まあ、都、三歳か四歳くらいだった。」

結構傷ついたから都にはそういう話しないようにしてたんだよと言って、じとつと私を見た。よくそんな昔のことを憶えている。十年間以上、健ちゃんは思うところもあっただろうが、黙っていたのだろう。

「なんかごめん。」

「いや、いいよ。面白がるわけでもなく信じる奴なんていないし。でも、あれだな。都のお母さんとかは俺の言うことかなり信用してくれてるみたいだ。」

「ああ、それは健ちゃんが私を助けたから。」

昨日の夜、母と祖母が話していたことを教えると、「それじゃ俺は都の命の恩人か。」と得意げに言った。「そうですね。」とわざとらしく言ってやったが、「じゃあ、もう行くから。」と言ってバスに戻って行った。

あと一つ聞くことがあった。急いで居間を出てサンダルを引っ掛け、追いかけた。外にでたとたん、強い日差しが降り注いできた。

「健ちゃん！」

ステップに上がりかけたところで呼びかけると、健ちゃんは振り返って「何だ？」と訊いた。

「あのさ、もう戸締りとか気を付けなくてもいいと思うんだけど、夜に外行ってもいいよね？」

「健ちゃんほぼかんとしてから、

「なんでそう思ったんだ？」

と苦笑いして尋ねた。

「昨日、外にいた人と目が合ったの。でも、危ない人じゃないというか……、とにかく、大丈夫だと思うから。そうでしょう？」

言う、「ああ。」と、納得したのかそう呟いた。けれど、後頭部を触りながら何か考えている。まだ何か隠しているのだろうか。

「まあそれは大丈夫だけさ……、もう少し用心した方がいいんじゃないか？ 都の家の人たちはなんて言うか、大らかすぎると思うぞ。特に都、大学行くなら来年から一人暮らしするんだろ。夕方は家にいるっていうのに慣れるべきだ。」

大したことでなかった。適当に返事をして「じゃあ、またね。」と手を振ると、健ちゃんは肩をすくめた。

「そんなんだから父さんも心配してきちゃうんだよ。」

と呆れたように言って奥に入って行った。

長い時間話していたようで実際はいつもと変わらず、健ちゃんは時刻表通りに出発していったようだ。

青を薄めたような瑞々しい空に、灰色の雲が浮かび始めた。流れてくる風が一層湿っぽく、太陽に焼かれた肌に纏わりついてくる。

頭上に陣取った雲が攻撃的なまでの日差しの傘になる。晴れ渡った空よりも、透き通った晴天よりも、雲が隠した薄墨色の方が優し気で落ち着く。雨が降る前の風が吹く瞬間が好きだ。ブランケットみたいな感触で湿気を含んで柔らかいのに、底の方には鋭利な冷たさが流

れている。寂しくて、孤独で。寂寞、焦燥感にひたひたと満たされていくような。蟬が大声で鳴いて、葉擦れがそこら中で響く。

中に誰もいないのを思い出し、急いで戻った。家全体を回って戸締りをし、台所の窓も閉めた。太陽が隠れて部屋が暗いことに気づき、照明をつけた。そのまま台所で盆飾りの馬と牛を作ることにした。

「もう来てるんなら馬はいらないよね。」

それ用にとって来たキュウリを別の箸に分けた。何となく肯定されたような気がするの
で牛の方だけ作ることにした。ナスと菜箸を取り出して、まずしっぽをつける用の穴を開け、そこにトウモロコシのヒゲを取り付けた。うまい具合に色が変わっていて、茶色と薄緑のグラデーションがしっぽの先まで続いて可愛い。そして、次である。割り箸を割るのは慎重になる。できるだけ根元を持って真横に引くのがコツだ。ただし、この時根元に近づきすぎると力が上手く加わらず失敗するので注意が必要。去年は失敗した。今年割り箸を割るのは初めてなので、気合を入れる。

結果は失敗だったが、気にしていても仕方ない。敗因は慎重になりすぎて必要な勢いが得られなかったことである。割った割り箸を今度は横に折る。断面が細かくささくれて、刺したときに安定するので包丁で少しあとをつけて、それから手で折る。

足が付いたのを調理台の上に静かに置いてやると、小さな牛は真っ直ぐ立って、なんだか可愛らしかった。家には仏壇がない。どこに飾るか迷ったが、居間の机の上に置いておくことにした。真ん中に置いてみた。端に片しておいた日本史の教科書とルーゼリーフの束を持ってきて広げると場所が狭くなったので、積んだ紙の束の上に重石のような感じで置いておくことにした。

雨が屋根に、やがて家全体に打ち付けられる音が響き始め、吹き込まないようなほんの僅かだけ開けた窓がひゅうひゅう鳴った。商品が濡れてしまうといけないので、店の玄関のドアも閉めた。硝子戸に叩きつけられる水飛沫のせいで外の様子は白く霞んで、伝う水滴の後に歪んだ緑が映るくらいだった。地鳴りのように、時折床が震えた。

パチツ、と音がしてシャープペンシルの芯が折れた。次の芯を出そうと数回ノックしたが、残りの長さが足りないのだろう。文字を書きつけようとペン先を紙の上においても引っ込んで、間抜けな感触を伝えるだけだった。シャープペンシルを置いて教科書を黙読する。健ちゃんが高校生の時に、歴史は本を読むみたいに覚えると言っていたのを思い出した。照明が光沢のある上質紙に反射して文字が光って見えづらかった。

去年の今頃は何をしていただろう。お盆休みは部活もなかったから、やっぱり今年と同じで家と岬を行き来するだけだったのだろうか。一昨年は丁度健ちゃんが社会人になったばかりで、まだ運転手にはなっていないだったので店の方までは来なかった。今、健ちゃんが来る時刻の便は父が乗っていた。丁度いまの健ちゃんと同じように小麦色の健康的な肌をしていた。私とは全く違う焼け方だった。

積乱雲と煙草の煙と、真っ白に燃える太陽。煙たい匂いの真っ黒の影が地面に伸びていた、

あるとき、もういなくなろうとしていたのだろうか。遙か遠く、眼下に見える波の合間に、肉親の姿を探すことほど、奇妙不可思議で、滑稽な作業は無かった。運転手もまた、正の字の一面に数えていけばよかったのか、車庫に眠ったバスにだって、主人がいなくなることは想定できなかっただろう。

死ぬのは、狡い。「死」ということ自体で、底に美しさみたいなのがある。岬の海は美しい。それは恐ろしいほどに。静謐な冷涼な海が眼前に見えるときそれはすべてを包み込んで、すべてを一緒にくたに、美しい思い出に書き変える。それには魅了されるが、そのくせ、手に入れた瞬間、失われるフィクション。水にふやけて傷もついた死体は寧ろ汚い。

岬に来る人らを、可哀そうだと思う。命を捨てるほどの苦しみが何なのか、私は知らない。知らないけれど、苦しくても生きると、言いたくなる。それが無意味で、結局自殺に繋がるのだと本で読んだけれど、それでも生きていて以外ないと思うのだから仕方ない。

一体何の用があつて帰ってきたんだ。置いて行つたくせに。健ちゃんには見えるでしょうが、私は見えない。帰ってきたのは別にいいとして、気配をチラつかせるのは何なのか。こっちは虚しくなるだけだというのに。家に帰りたいんだったら生きていればよかったんだ。生きていたら話ができる、生きていたら同じ時間を過ごせる。

勉強していたはずが随分脱線してしまった。どうも頭を使う作業をしているとあらぬ方向に思考が傾きがちだ。投げ出していた日本史の教科書を拾い上げて紙の束の横に揃えて置いた。そろそろ十五時の便が来る。すぐに去ると思つていた雲は空を覆つたままだし、雨は酷く、遠くで落雷の音も聞こえ始めた。サンダルを履いて立ち上がるのとほぼ同時に、バスのエンジン音が絶え間なく打ち付ける雨の間を縫つて微かに聞こえてきた。

入口の硝子戸を開けた途端、雨の飛沫が襲い掛かるように吹き込んできた。最早、台風のようだ。引き戸なので開く幅をほんの少しにして待つ。完全に閉めてしまふとあつという間に外は見えなくなるし、そうなる人数が数えられなくなる。この雨で誰か来るとも思えないが念のためだ。この時間の運転手は田崎さんという五十代の男の人で、きつちりした人だから、この雨でも遅れず来るだろう。健ちゃんは町中を走っている頃だ。

小さく開けた戸の隙間から水滴を手で避けながら目を凝らした。目を細めて白く靄がある見通しの悪い景色の先に、一人、誰かがバスを降りたのが見えた。

風で乱れるショートボブの髪を機にかけながらも、竜胆やカーネーションの花束を守るように抱えていた。服は灰青のロングスカートと白い半袖の大人っぽいシャツを着ている。ステップを降りながら、何か運転手と話しているらしかった。運転手がこちらを指さすと、小さく頭を下げて駆けて来た。近づいてみると、彼女の顔はよく見知ったものだった。何故ここにいるんだらう。

「塔子、久しぶり。」

「えっ、みやこ先輩？」

「とりあえず、入って。雨が吹きこんじゃうわ。」

「はいっ、失礼します。」

突然先輩が現れては、混乱する気持ちもわからないでもない。畏まった様子で店内に入ってきた彼女はまるで、借りてきた猫のようだ。私の方を伺いつつ、雨に濡れて頬に張り付いた髪をチマチマと細い指で剥がしている姿は、毛づくろいみたいだった。

「ちよつと待ってて。タオル持ってくるから。そのお花はそのの、カウンターのの上でも置いて。」

言って、大急ぎで洗面所に向かった。棚を開けキレイ目のタオルを二つ持ち、小走りに戻った。

「はい、どうぞ。」

「ありがとうございます。……すみません。」

「いいえ。」

塔子は顔や腕やを、ポンポン拭った。私も同じように水滴のついた髪を崩れない程度に拭いて、タオルをカウンターに置いた。束ねられた花々は雨に濡れ、水滴に反射する光でキレイに飾られている。傷ついてはいないようだ。塔子は何か言いたそうにしているが、驚き困惑した表情を浮かべるばかりで、黙々と自分の体を拭うばかりだった。

会うのは夏休み前ぶりだ。会うと言っても廊下で立ち話をしたり、挨拶をしたりだったので、面と向かって話す機会を得たのは六月初旬の、最後の大会の時だった。塔子は剣道部の二年の後輩で、中学からの付き合いだ。おそらく、健ちゃんの次に親しい。新部員の勧誘にことごとく失敗したため中高ともに部員の顔ぶれは変わらず、しかも、同級に女子部員はいなかった。ずっと女子部員二人きりだったので、親しくなったのは必然だろう。退部して諸々の道具はクローゼットの奥に眠っているが、塔子と揃いの御守りだけは、竹刀ケースから通学鞆に付け替えた。

確か、塔子の家はバスで下って行った学校よりも、さらに遠くだった。ここまで来るには、かなり時間がかかっただろう。落ち着いた色調の花束は、誰に手向けるのだろうか。戻って来なかった乗客の中に彼女の知り合いがいたのかもしれない。

「みやこ先輩、髪、伸びましたね。」

「あー、そうだね。切る理由なかったから。」

元々、部活後にシャワーを浴びた時すぐ乾くように短くしていたが、ドライヤーを持っていけばいいと気づいた時から伸ばしだした。それが四月くらいなので、今は肩を越えるくらいの長さになっている。

「塔子は短くしたのね。肩くらいも似合っていたけど、それはそれで。」

彼女の小さい顔に沿うようにスッキリした髪型は似合っていた。

「失恋でもしたの。」

笑いながら言った。塔子は、はにかみ、目を逸らした。

「……部屋入ろう。海の方行くなり止んでからにしなね。」

居間には健ちゃんが座っていた座布団があるので、裏返して置いた。飲み物を用意しようと台所に行くと、流しに空のポットが置かれている。洗おうと思っ忘れていた。雨にあた

って冷えたので、温かいものでもいいかと鍋で湯を沸かし、自分の分はさつきと同じコップを軽く洗って使う。健ちゃんに出したときのようなグラスは耐熱性がないので、塔子には食器棚から新しく白いティーカップを出した。紅茶のパックに沸騰した湯を注ぐと香りのいい湯気が上がる。少し待ってからパックを引き上げ、牛乳と砂糖と一緒にトレーにのせて居間に運んだ。

「お待たせ。牛乳と砂糖は自由にどうぞ。」

「わあ、ありがとうございます。」

塔子は嬉しそうに言って、熱いカップに口をつけた。一口飲んでから牛乳を少しと、砂糖を二杯、紅茶に溶かした。

「砂糖いっぱい入れるね。」

「甘い好きなんです。みやこ先輩はそういうイメージないかも。」

「そうだね、お茶とコーヒーは何も入れない方が好き。でも甘いのも食べるよ。そうだ。」
思い出して台所に向かった。コンロの下の引き出しに中くらいの箱を見つけて持って行った。

「貰い物だけど、おいしそうだからこれ食べよう。」

「クッキーだ。贈答用のですね。」

「この間、駐在さんに貰ったんだよね。」

「駐在さんって……、交番の人ですか？」

「そうそう、高橋さんっていう。」

「警察ってこういうの送っていいんですねえ。」

「いやー、どうだろ。田舎だからな。あと場所が場所なんで、この店が役に立つこと多いの。」
店宛のお礼、ということらしくて、祖母が貰ってきたものだ。いつでも食べていいと言われていたが、タイミングを逃していたので丁度良かった。コア味のクッキーを一つ食べてみると、バターの塩気と甘さがマッチしていて、ホロホロ崩れていく触感もいい。

「みやこ先輩の家、ここだったんですね。お店やってるって知らなかったです。」

言っていないかったか、しかし、言うほどのことでもない。塔子の家は町の方の、学校よりも中心に近い方にあるので、買い物ついでに立ち寄ったことがある。新しめの一軒家で住みやすそうなお店だった。私の家は来ても何もないし辺鄙な所にあるので、呼ぶ機会はなかったというだけだ。

「今日はなんでここに来たの？」

この時期に花束を持ってくるのだから、誰かを弔いに来ただろうことはわかる。でも、それが塔子と繋がらなかった。いつも明るく、誰かを亡くしたという話を聞いたことがなかった。

「これをお供えに来たんです。」

花束をそつと持ち上げて、塔子は微笑んだ。

「みやこ先輩、最近、七月の終わりに岬に落ちた男の人がいたでしょう。あの人はわたしの

知り合いだったんです。道場の先輩でした。」

微笑んでいたけれど、伏せ気味の目は笑っていなかった。塔子はティーカップを持ち上げ紅茶を一息に飲み干した。そっと置かれたカップの底の方に、溶け切らなかつた砂糖が溜まっていた。

「その人とは仲が良かったの？」

「いいえ？ あの人はわたしのこと、あまり知らなかつたんじゃないかな。そうなんですけどね。」

わたしは好きだったんです。と、塔子は言った。

コップを取って、一口飲んだ。何故かいつもより渋い味がした。容器を取って砂糖を一杯入れてみると、甘すぎて飲めなくなつた。私は塔子にばれない様のため息をついた。

「……好きだったんか。」

「そうなんです。」

私は塔子から目を逸らした。塔子の表情は恋する乙女のそれだったが、その相手は既にいなくなつていて、彼女もわかつていた。そして、塔子の意中の相手は私が見殺しにした、正の字の一画だった。けれどそんなことをこの子に言えるはずもなかつた。

「先輩のお父さんも、その……」

「……そうね。あの時は全然気づかなかつた。」

父の時は知らないで、死んだ後もわからなかつた。辛かつたのか、苦しかつたのか。この先もずっとわからないのだろう。私は苛立たしく思ったし、何より悲しかつた。それ以上に母は悲しんでいた。私は泣けなかつたけれど、そうだ、母さんは泣いていた。

「わたし、わかつてたんですよ。」

塔子がぼつりと言つた。

「あの人が大変なことはわかつていたんです。大学の部内で上手くいっていかないとか、疲れた様子だつたのも見ていたんです。でも、何もできませんでした。わたしはあの人に憧れてはいたけれど、隣に立つことは出来なかつたから。……もう会えないんですよね。幽霊になつたってわたしのところには来るはずがないもの。」

花束を見つめる目は黒く潤んでいた。塔子の思いは、まったく仕方のないことだつた。中途半端に近くにいる人は、寧ろ、内側に入り込んで行けないものだ。好きならなおのこと。私ならそれができたかもしれない。目の前の、泣きそうな後輩の笑顔を守れたかもしれない。つた。

父は私たちの元に帰つてきた。私たちが家族で、父の一番大切なものだつたから。でも、塔子のところに彼は来ない。彼の帰りたい場所は其処にないから。

望みもしない、信じもしなかつた私のところに来て、塔子の元には来ない。私たちと、亡くなつたあの人たちの思いは一方通行でしかない。帰りたい場所が帰るべき場所とは限らないだろう。帰りたい人が帰るべき人とは限らないだろう。

「塔子は悪くないよ。」

泣いている彼女に私は言った。詐欺師のような甘言だった。

知らないことは罪になる。しかし、知っていて助けられないのはそれ以上の罪だ。だけれど、仕方のないことだってあるだろう。塔子は悪くない。仕方のないことだった。私は塔子を泣かせた奴を懲らしめてやりたかったが、そいつは既に死んで、すべてを許されただろう。怒ったところでこれもまた、一方通行だった。

結局、最後まで、こういう仕方のない罪を背負っていかなくてはならない。墓場まで持つていく。生まれた時点で平等に決められているから仕方ない。それに負けないで生きていくのは苦しいんだろう。塵のように、重石のように、積もっていく。

雨がさらさらと音を立てて降り続いた。風は静かに、秋風のように雨粒を揺らした。

「ね、フダラクって知ってる？」

「……知らないです。」

「だよ、私もさつき教えてもらったの。海の向こうにある、極楽みたいな場所なんだって。この海で死んだ人はみんな、そこに帰って行くの。だから塔子の好きな人も、きっと海の向こうで安らかにしてるよ。」

健ちゃんの話の思い浮かべた。死後の暗闇に入れなかった人の居場所。南向きの海から船を流す奇妙な風習。救われなかったすべてを、まとめて救ってしまう夢の国。

「不思議な話ですね。」

塔子が言った。

「なんか、みやこ先輩の言うこと説得力がありますね。本当にそうなのかもって思いました。」

真っ直ぐな瞳だった。どうやら、塔子は何かを乗り越えたようだった。彼女が本当だと思っただのなら、それは彼女の信じた気持の表れだ。

「塔子はすごいねえ。」

「え、なんでですか？ みやこ先輩の方が強いじゃないですか。」

「強くないって。剣道もそうだったでしょ。」

「そんなわけじゃないですよ。」

首を傾げて笑う姿は可愛らしかった。塔子が羨ましい。真っ直ぐで、すべてを受け止めても乗り越えられるくらい強いから。母も祖母もそうだ。父がいなくなった時、泣かなかったんじゃないって、泣けなかった。未だに実感なんてないし、理屈を捏ねすぎたせいで、もう何が本当かわからなくなった。悲しいんだろうなと思っても、自分の気持ちすら真っ直ぐ感じることができない。

「塔子はずつとそのままでいてね。はい、もっとお菓子食べて。お茶持ってくる。」

私はクッキーを箱から出して、塔子に押し付けた。塔子のカップを流しに持って行って、また湯を沸かし、沸騰するのを待った。

ずつとそのままと願ったのは嘘じゃない。羨望し、大切に守りたい気持ちになったものでも、それができるのは私じゃなくて、塔子自身だ。他人をどうにもできないというのは、

生きていてもそうじゃなくても同じことだ。ボコボコと湯が沸騰する音がする。代わりに雨の音はしなくなっていた。窓から光の筋が、糸のように差し込んできた。

「はいどーぞ。もう雨あがったから外出ても大丈夫だよ。」

「はい、ありがとうございます。」

「気をつけなね。」

カップを持ち上げたかと思えば、塔子はグイッと熱い紅茶を飲み干して立ち上がった。

「ちよっと、大丈夫？ 口の中やけどしてない？」

「大丈夫です。熱いの得意なので。クッキーたくさん食べて口が甘くなっていたし。」

塔子にはこりと笑った。花束を抱え上げて玄関に向かう。

「じゃあ、行きます。」

「うん、気を付けてね。」

店のドアを開けると、光が膨らんで目に飛び込んできた。雲間から差し込む光が水たまりをキラキラと光らせた。ちょうど店の上から照らされているようで、眩しかった。

私は思いだしてカウンターに戻った。卓上メモに正の字の一面を書いた。人が記号に、数字に代わる瞬間……。

「みやこ先輩！」

目を向けると塔子が手招いて言った。

「先輩も行きましょう！一緒に」

「なんでー？」

こういうときは一人で行きたいものじゃなからうか。この素直な後輩の不思議な言動は、あまり読めないときがある。

サンダルをぺたぺた言わせながら外に出ていくと、塔子はグイッと私の手を引いた。

「さあ、先輩、岬まで競争しましょう。」

そう言っただけで塔子は走り出した。

「待って、私サンダルなんだけど。」

既に走り始めてしまった彼女の耳には届かなかった。見てみると、塔子も走りづらそうなヒールを履いている。本人は気にしていないようだった。

先に走っていく塔子を追いかける。走っているとき、耳の横をふうふうと風が吹き抜け、肌をなぞっていく感覚が好きだった。自分の輪郭が明瞭になって、心地がいい。進んでいくと、横の林から蝉の声が聞こえ始める。一匹が鳴きだすと、次々に声上がる。前を走る塔子の髪が足の運びに合わせて揺れる。手に持った花束も揺れる。塔子の走りを見ると道着をぶら下げる。部活が終わって以来走るのも久しぶりだ。こうして二人で走っていると道着を着て、校庭の周りを走ったのを思い出す。塔子にとってはどうだったのだろうか。思い出は変わっていくものだ。それでも懐かしく、愛おしく思う気持ち否定することはできない。父の思い出も、捨て去ることができないのはわかっていた。

髪が風に靡いて、開けた視界に映る空は美しかった。

岬の中心に立って、息を整えた。塔子はそんな私も見ても「体力落ちましたか？」と笑った。彼女の顔はすっきりしていて、このために走り出したのかもしれないなかった。

「ねえ、みやこ先輩。あの空の光の筋、天使とか降りてきそうな感じしません？」

「そうだね。きれいー。」

「もっと前に行ってみましょう。」

塔子は私の手を引いて岬の先に足を向けた。

「滑るから気を付けないと。」

雨で少し荒れた海には船が一隻もなく、広い海原のうねる波に反射する光の円が、ぼつりぼつりと浮かんでいる。岩に打ち付けるしぶきがこちらまで届いているかのよう錯覚するほど、力強く波打っている。その生命力は広く深い。肌を感じる迫力に圧倒される。

「きれいですね、海って。」

そう言って塔子は泣いていた。笑いながら、泣いていた。

「みやこ先輩、わたし、やっぱり悲しいみたいです。でも、先輩と綺麗な海見れて嬉しいです。あと、一緒に走るのも楽しかったです。」

塔子は花束の包装を解いた。両手に抱えた花々は可憐で、海と同じくらい美しかった。

花が宙に舞う。青、白、緑、一瞬のうちにすべての色が海に溶けて消えていった。

「きれいですね、先輩。」

塔子は海を見つめていった。涙が頬を伝っている。

「はは、なんで先輩も泣いてるんですか。」

けらけら笑う声を聞く。つられて私も笑いだす。蝉の声と笑い声が混ざって、寂しい岬に響いた。拭ってもあふれ出る涙は、いろんな感情が混ざっているようで、自分にも理解ができなかった。よくわからないが今はそれで構わない。いつかわかる日が来てくれればそれでいい。

「海、きれいだなあ。」

「きれいですねえ。」

二人で、それだけを繰り返して笑いあった。

「へえ、後輩に補陀落の話したのか。」

「そう、なんか役に立ったみたいだったよ。」

次の日の昼、健ちゃんが出てきた。昨日の午後の涼しさはもうどこかに行ってしまった。太陽は痛いくらいに照っているし、風は生温かくなっていた。

塔子は十八時の便で帰って行った。その時せっかくだからと、馬に使おうとしていたキュウリと、家に残っていたナスを全部渡して帰らせた。おかげで、夕飯はナス料理を免れたが祖母がまた取ってくるだろう。

「昨日は色々あったな。」

息をつくど、

「そうみたいだな。」

言って健ちゃんは私の頭を撫でた。恥ずかしくなって手を払うと、笑われた。

「それで？ 健ちゃん、父さんと話した？」

「ん、ちよつとだけどな。」

「どんな話したの？」

尋ねると、健ちゃんは後頭部を触って口籠る。

「ああ、いろいろと。」

はつきりしない答えだった。

「何よそれ。」

一体、父は何を言ったのか。むっとして健ちゃんを叩くと、

「いや、都が思春期だって……。」

申し訳なさそうに言われた方が癩に障る。確かにそうかもしれないけれど。乱暴にぐいと麦茶を飲んで外を見た。風鈴が優しく揺れている。

あまりに強い太陽のせいか、木の葉を焚いたような匂いがした。いや、それよりもっと嗅ぎなれた懐かしい匂い。

「なんか、煙草の匂いする。」

呟くと、

「匂いはわかるんだな。」

そう言って健ちゃんが微笑んだ。

夏の風に、日の光と揺れる陽炎。それよりもっと近くに煙草の煙の揺らめく影が、見えるような気がした。